

ルイセンコ「小麦はライ麦に変化し
うる」あるいは「 $2+2=5$ 」～レベッ
カ・ソルニット『オーウエルの薔薇』
を読んで～

西川 伸一

レベッカ・ソルニット、川端康雄／ハーン
小路恭子訳（2022）『オーウエルの薔薇』岩
波書店刊を一読した。本書は1936年春にオー
ウエルが薔薇を植えたことから始まるものの、
オーウエルの伝記に列せられることを望まな
い。むしろオーウエルの生涯と作品の紹介に
十分意を尽くしつつも、そこから「大胆に脱
線」し、話題を「曲折」「蛇行」させていく。
そうした本書を読み進めるうちに私が最も興
味をそそられたのが、「IV—2 嘘の帝国」で
記述されるルイセンコをめぐる話題である。

育種家のトロフィム・ルイセンコ（1898
—1976）はスターリン時代にルイセンコ学
説とよばれる独特の遺伝理論を提唱した。そ

してソ連における遺伝学研究的の寵児となった。というのも、それがマルクス・レーニン主義に親和的で、スターリンの農業政策を下支えする学説だったからである。ルイセンコは、当時主流をなしていたメンデル遺伝学を「ブルジョワ科学」と批判して、スターリンに取り入った。不十分な実験結果に基づく彼の学説によれば、遺伝的性質は環境との相互作用で変化するのであり、したがって比較的短時間で種は変わる。存在が意識を規定するとの唯物史観の公式に似て、環境が種を規定するというわけだ。

ゆえに「小麦はライ麦に変化する」ことになる。この記事見出しをみつけたオーウェルは日記にそれを貼り付けた。没する5週間前の1949年12月のことである。記事にはルイセンコの次の言葉が引かれていた。「好ましからざる冬季の状況を有する山岳地帯では、冬麦はライ麦に変化する」。

スターリンの農業政策は科学を無視したものであった。スターリンは人間と同様に小麦も改変可能と説くルイセンコの似非科学を盲信して、農業にズブの素人官僚を集団農場へ送り込んだ。その破滅的結果が1932年から1933年にかけてウクライナを襲ったホロドモールとよばれる大飢饉である。数百万人が死亡したとされる。映画『赤い闇 スターリンの冷たい大地で』（2019）でも描かれ、子どもたちが兄コーリヤの肉を調理して食べるシーンが出てくる。

ソ連はずっとこの事実を否定し続け、ソ連にいた西側のジャーナリストも打算などからこれに目をつぶった。一方、現地にも密かに入って大飢饉の実態を報じた数少ないジャーナリストの一人が、イギリス人のガレン・ジョーンズである。映画の原題“Mr. Jones”はずばり彼の名前から取られている。その後ジョーンズは「満州国」へ取材に赴き、1935年にそこで暗殺される。映画にはオーウェルも登場するが、二人の間で実際に面識があったかは不明のようだ。ただ、『動物農場』で動物たちから追い出される荘園主がMr. Jonesと名

付けられているのは、偶然の一致なのだろうか。

話が「曲折」「蛇行」してしまった。ルイセンコに戻そう。ルイセンコはスターリンに認められた御用似非学者として出世を遂げて、遺伝学研究所所長に就くまでになる。ルイセンコ学説はソ連の公式学説に祭り上げられ、それへの科学的批判は命と引き換える覚悟を要した。ホロドモールをはじめ「その嘘の代償がどれほど大きなものであるか」を算出するには、いくら桁数の多い電算機でも到底使い物にならない。加えて、ソルニットが引用する生物学者のジョン・R・ペイカーの発言は、いまの日本の状況に照らしてもきわめて示唆的である。「科学の自律性が失われるとき、状況は現実離れたものになる。どこまでも善良な意図に基づいていたとしても、政治的な指導者たちには、真摯な研究者と、自分を売り込むことに必死な見かけ倒しの人間の区別がつかないのだから」。

内閣府は2022年12月6日に「日本学術会議の在り方についての方針」を公表した。それは「政府等と問題意識や時間軸等を共有」することを日本学術会議に求めている。同趣旨の表現が「方針」には4回もみられる。なので「共有」が最重要の要求であることは明らかである。要するに、国策に協力する御用機関に成り下がれと暗に命じているに等しい。さらに、日本学術会議が応じなければ、「国とは別の法人格を有する独立した組織とする」と威嚇さえする。日本学術会議は「方針」に屈従してしまうのか。その先には、「自分を売り込むことに必死な見かけ倒し」のルイセンコのような「現実離れた」似非研究者が跋扈する未来が待ち受けていよう。ペイカーはまた「科学者にとって主な自由とは疑問を持つ自由なのだ」とも言う。この至言に「方針」はまったく無自覚だと考えざるを得ない。

ところで、「IV」の扉に「 $2+2=5$ 」と大書されたポスターの写真が掲げられている。ソ連で1931年に作成されたものだ。「 $2+2$ 」の

